

## ベートーヴェンが弾くピアノを“生”で聴いているかのよう

栗原 安倍圭子さんは、それまで南米の一民族樂器にすぎないと思われがちだったマリンバという樂器を、その世界的な活動によって「音樂芸術のための樂器」に高めた偉人ですね。田代さんは、安倍さんに師事されただけでなく、この師匠と共に演じるステージをたびたび実現しているわけですから、実は私、お二人の演奏スタイルは、いぶん違うなあという印象があるんです。

この師匠と共に演じるステージをたびたび実現しているわけですから、実は私、お二人の演奏スタイルは、いぶん違うなあという印象があるんです。端的にいって、安倍さんはトレス口同音を小刻みに鳴らす奏法で、舞台に紗のかかるような音のグラデーションを作っていくタイプ、田代さんはキビキビと音の輝きを際立たせるタイプではないかなあと。こういったスタイルの違いはどうやって生まれてきたのでしょうか?

田代 まあ、意外ですねえ(笑)。たぶんその印象は、栗原さんが私のステージを見てくださった時の曲目のタイプが、たまたまキビキビしていたのだと思います。私自身は、安倍圭子の弟子として、あくまでも「風」のような音づくりが理想です。

栗原 今おっしゃった「曲目のタイプ」ですが、マリンバの場合いくつぐらいのスタイルがあるのでしょう?

田代 おおまかに3つのスタイルがあります。1つ目は安倍圭子が生み出した「トレモロの風」の世界。2つ目は「音をくつきり聞かせていくスタイル。このタイプは安倍圭子とは対照的に、とても硬質な音色で旋律を作ります。そして3つ目は、複数の演奏者がマリンバの周りをくるくると回ったりしながらステージ空間を視覚的に彩るスタイル。このタイプは「目で見るおもししさ」に満ちています。

栗原 そうすると、安倍芸術といふのは、ある意味、マリンバの響きそのものを、もっと洪く、彈きこんでいく世界になりますね。

田代 ええ。派手な見せ場はどこにもありません。でも、マリンバという樂器の持つ「響きの可能性」を極限まで表現している安倍圭子の演奏を聴けるということは、まるでベートーヴェン本人が奏するのにふさわしいピアノという樂器は抜擢されたわけですが、ベートーヴェンはちょうどその時期に、ピアノ独自の可能性を極限まで表現した作曲家でした。マリンバの場合も、安倍芸術がなければ、単に「木琴に共鳴バイブルがぶらさがったもの」というイメージに留まついたかも知れないわけですね。

田代 不思議なことに「師匠と演奏する」という意味での畏れは、ほとんど感じません。普通、演奏家は本番直前になると、多かれ少なかれ、周囲に「ビリビリとした空気」をまき散らしてしまうのですが、安倍圭子という音樂家は、むしろ「リラックスの空気」をまき散らすんです。そして、その空気が「広がる」というのが本当に体験してきたことです。

その傘を、客席から感じる方もいらっしゃるんですよ。安倍芸術の場合、彩どね、薄い半円球の傘のようなものが、ステージを包み込むんですよ。それは、安倍圭子と共に演じた世界中の多くのプレイヤーが本当に体験してきたことです。いやーが本当に体験してきたことです。

栗原 そういえば私自身も、安倍圭子のステージを、音色のグラデーションで「舞台上に紗かかる」というイメージで捉えていました。安倍芸術の場合、彩どね、薄い半円球の傘のようなものが、ス

テージを包み込むんですよ。それは、安倍圭子と共に演じた世界中の多くのプレイヤーが本当に体験してきたことです。その傘を、客席から感じる方もいらっしゃるんですよ。

田代 4月17日、西南学院大学での「安倍圭子チャペル・ナイト・ウィズ田代佳代子」では、音色と空間とのコラボレーションを、いつも豊かに展開できます。熱心なクリスチヤンである安倍圭子は、以前から、コンサートホールでなく教会で演奏してみましょうと説いてくださいましたのです。

栗原 演奏曲目も安倍圭子作品が多いたですね。安倍さんのソロ(独奏)では、響きの傘に注目したいと思います。安倍圭子は、以前から、「コンサートホールでなく教会で演奏してみましょう」と説いてくださいましたのです。

田代 デュオの場合二人の奏者が、互いにマリンバの響きや息づかいを掛け合ひながら、全体としての響きを作っていく

栗原 ます。私の弾くパートは本番でかなり即興性をおびるので、とてもエキサイティングなセッション体験になると思いまして。田島由理さんとホーファーさんのカツップが、このステージのためにアーティストから来日されるそうですね。

田代 「森の会話」シリーズは、安倍圭子のソロ作品「プリズム」を下敷きにしたセッションもので。「プリズム」で奏たされた様々な音の断片が、各フレイバーに割りあてられていて、それをその場で即興的に絡み合わせるのです。マリンバを使つて、音の会話をすることは、とても楽しいですよ。以前、安倍圭子と私の共演を聞いてくださったO-Lの方

が、「ご自身のブログに書いていらしたことを、たまたま読むことができて、その時は共感どうれしさで涙が出てました。その方は、囁くような音、笑うような音、叫ぶような音、怒るような音、恐怖するような音が聞こえた」と。

栗原 なるほど、意味深い聆听だと思います。19世紀「さう大きなホールで演奏するのにふさわしいピアノ」という楽

器は抜擢されたわけですが、ベートーヴェンはちょうどその時期に、ピアノ独自の可能性を極限まで表現した作曲家でした。マリンバの場合も、安倍芸術がなければ、単に「木琴に共鳴バイブルがぶらさがったもの」というイメージに留まついたかも知れないわけですね。

栗原 安倍作品では、演奏者側の視点からポジティブに捉えられる即興の音楽が聴けそうですね。今までマリンバに馴染みがなかった方やお子さんも、チャペルの雰囲気を味わいながら、やさしい音色に耳を傾けてみてください。

栗原 「ご自身の師匠と共に演じるにあたっては、また、特別な思い入れもありますよね?」

(文・栗原詩子)

# “響きの可能性”を極限まで表現した音のグラデーション直前スペシャル対談!!

西南学院大学  
音楽学者  
栗原詩子



「黄金比率」の音響空間と評される、西南学院大学のチャペル。  
4月17日、この空間にて世界的マリンバ奏者

安倍圭子さんを招いてのマリンバコンサートが開かれる。  
マリンバ奏者の田代佳代子さんと当日会場にもなる  
西南学院大学で教鞭をとる音楽学者の栗原詩子さんに  
マリンバや安倍芸術の魅力について語ってもらつた。



ホール・オブ・フェーム栄誉賞を  
世界で初めて受賞したマリンバ演奏家  
安倍圭子(あべ けいこ)

国際的マリンバ演奏家。演奏活動の幅は広く、世界50カ国に及ぶ。また、世界90校以上の音楽大学で音楽指導を行い、50箇所以上の音楽祭に出演。マリンバの為のオリジナル曲を求めて、今まで自作品と委嘱初演した作品は270曲を超え、世界中のマリンバ奏者に演奏されている。文化庁芸術祭優秀賞を6回受賞。1993年国際打楽器芸術協会(本部:米国)よりホール・オブ・フェーム栄誉賞を世界最初のマリンバ演奏家として受賞。安倍圭子オフィシャルサイト <http://www.keiko-abe.com>

## 安倍圭子マリンバコンサート 九州を代表する マリンバ奏者 田代佳代子



2010年4月17日(土) 18:00開演(17:30開場)

会場／西南学院大学チャペル 料金／一般 4,000円 小中高生 3,000円(全席自由) ※未就学児の入場はご遠慮願います。  
出演／安倍圭子・田代佳代子・Christopher Karl Hoefer(クリストファー・カール・ホーファー)・ホーファー田島由理  
【演奏曲目】古代からの手紙 小品メドレー(チューリップ・ポルカ、フィドル・ファドル、他) 森の会話V

■主催／西南学院大学 ■共催／株式会社 アヴァンティ  
■協賛／○ヤマハ株式会社 ○(株)ヤマハミュージック九州福岡店 ■後援／○福岡県教育委員会 ○福岡市教育委員会 ○西日本新聞社 ○毎日新聞社 ○読売新聞西部本社 ○KBS福岡放送 ○TVQ九州放送 ○テレビ西日本 ○FM FUKUOKA ○クロスエフエム  
■チケット取扱い／○ローソンチケット Lコード86330(0570-084-008・<http://l-tike.com/>)  
○電子チケットぴあ Pコード341-845(0570-02-9999・<http://t.pia.jp/>)  
○FFACアートリエ ○ヤマハミュージック九州福岡店(天神) ○クレモナ楽器 ○イズタバイオリン  
■問合せ／(株)アヴァンティ TEL.092-724-3226  
(株)キャンパスサポート西南 TEL.092-823-3576 西南学院大学(栗原) TEL.080-3961-7654  
※託児サービスあり(有料:2000円)要事前申込(080-3961-7654)